

資料

入学前授業終了時調査からみる入学前の不安と年代別特性

西出 順子 金川 治美 武 ユカリ 小坂 素子

**Anxieties and its characteristics in different age groups shown
by the survey implemented after the precollege program**

Junko NISHIDE, Harumi KANEGAWA, Yukari TAKE, and Motoko KOSAKA

Summary

Objectives: To obtain the indicator of effective educational support, the anxieties of the newcomers of two-year correspondence course of nursing before the enrollment and the features of these in different age groups were examined based on the survey after the precollege class.

Methods: A self-writing questionnaire was implemented to 124 students attending the precollege class in 2012. The questionnaire was composed of 8 queries of backgrounds, 9 of anxieties before enrollment, which requested the students to select one from five alternatives. Answering by writing was also requested in some queries. The results were simply aggregated. Answers by writing about anxieties were codified, classified and named.

Results: "Writing reports" was the most anxious factor in the 9 queries, followed accordingly by "Securing time to study", "Understandings of contents of studies", "Compatibility of study and work", etc. Viewing by age, in thirties "Securing time to study" was more anxious than other issues, likewise "Understandings of contents of studies" in forties. In fifties, anxiety to "Compatibility of study and work" was conspicuously higher than that of other age groups.

Conclusion: We conclude "utilization of the experiences of students", "esteem of independence" and "appropriate provision of the subjects of studies" are important to lessen the anxieties.

要 旨

＜研究目的＞効果的な教育支援の指標を得るため、入学前授業終了時調査をもとに看護学科通信制課程（2年課程）の学生の入学前不安とその年代別特性を検討する。

＜研究方法＞2012年度の入学前授業後に参加者124人に対し、自記式質問紙調査を実施した。質問は対象者の

背景8項目と入学前不安9項目で5件法の選択式と自由記述とし、結果は単純集計した。不安についての自由記述記載は文脈をコード化し分類、ネーミングした。

〈結果〉入学前不安の9項目の質問で「やや不安」「不安」が最も多かったのは『レポート作成』であり、続いて順に『学習時間の確保』『学習内容の理解』『仕事との両立』等であった。年代別にみると、30歳代は『学習時間の確保』、40歳代は『学習内容の理解』が他項目より高く、50歳代では他年代と比べて『仕事との両立』の不安が高いことが解った。

〈結語〉入学前不安からその年代別の特性を知ることが出来た。本調査から解った成人期の学生の入学前不安の特性をもとに、成人学習理論の観点から「学生の過去の経験の活用」「自立性の尊重」「適切な学習課題提供」が重要と認識した。

【キーワード】 看護師移行教育 通信制課程 成人学習 入学前不安

I. はじめに

看護学科通信制課程では、10年以上の臨床経験を持つ准看護師を対象とした看護師移行教育を行っている。入学生の殆どが就労しており、通信制課程のため対面授業が少なくレポート課題を用いた添削学習が中心であり、長く学業から離れていること等の特徴がある。これらの特徴をもつ学生が、レポート学習の意義と進め方を理解し、入学後に円滑に学習を進めることができるように支援することを目的に、筆者らは2011年度から入学前教育（プレカレッジ）を実施し¹⁾ 検討し報告してきた²⁾。

2011年度の報告『2年課程（通信制）看護学科における入学前教育の実施と検討（1）－授業終了時の質問紙調査から－』²⁾では、「約半数は入学前授業の内容を理解したが不安の軽減にはつながらなかった」「入学生の多くは学習に意欲的な姿勢がうかがえる」と考察し、次年度の入学前教育への示唆を得た。そこで2012年度は授業教材を精選し、授業目的を『入学後スムーズに学習に取り組む準備ができる』とし、授業目標を「レポート学習の学習としての意味が理解できる」「レポート作成のプロセスがイメージできる」と改めた。2012年度の授業終了後も質問紙調査を実施し、検討し、『2年生課程（通信制）看護学科における入学前教育の実施と検討（2）－授業終了時調査の自由記述からみた特性－』³⁾で報

告した。この報告では自由記述欄の文脈を分析し【学習課題に関する懸念と不安】【レポート課題に対する苦手、不安】【成人期にある学生の役割に関わる不安と懸念】等、入学前の不安に関わるカテゴリを抽出した。この結果から筆者らは学生の入学前の不安から、学生の特性の理解を深める必要があると考えた。

看護学科通信制課程の入学生の年齢は、成人期の20歳代後半から60歳代までと幅広く、年齢に応じた発達課題を持ち、役割が多様なことが大きな特徴である。看護基礎教育の一環としての看護師移行教育であるが、成人期教育の要素が大きく、教員は成人学習者固有の教育課題への対応が求められる。

看護基礎教育領域での成人教育に関連する先行研究をみると、看護学士課程へ編入学した学生をテーマにした研究⁴⁾、看護専修学校への社会人入学をテーマにした報告⁵⁾⁶⁾がある。小濱⁶⁾は看護基礎教育機関（専修学校）の教育者を対象にリカレント教育について調査し、2年課程の教員から「新しい学習が困難」「経験が先行」「ゆとりのなさ」「学習習慣を取り戻すのに時間がかかる」等の回答を得て、「教育者は成人学習者の個々の発達課題をよく理解し、相互の関係をみながら教育者の様々な役割を効果的に発揮できる能力が要求される」と述べている。横山らの研究⁴⁾、江頭⁵⁾、小濱⁶⁾の報告に共通するのは、教育対象者の年齢が一樣でなく、職業経歴も様々

で、発達段階からみると成人期に該当する成人学習者であると理解できる。横山ら⁴⁾は Knowles, M の成人学習理論⁷⁾を用い「よりよい学習を展開できる成人学習者は、自己の経験を学習資源とするという特徴を持ち、学習者自身の経験を活用する必要がある。これは、学童期、青年期の学習者が教員の蓄積した知識と経験を重要な学習資源とすることと対照的である」と述べている。

そこで本研究では、看護学科通信制課程で学ぶ成人学習者が持つ入学前の不安から、年代別特性を調べ考察することで、学生の理解を深め効果的な教育支援のための指標を得たいと考えている。

II. 看護学科通信制課程の学習形態

看護学科通信制課程の学習形態には、「テキスト学習」「面接授業」「臨地実習」がある。「テキスト学習」は卒業要件に必要な66単位のうち50単位を占め、印刷教材を用いて自学自習を行い、課題を提出し添削指導を受け、最後に試験を受験する形態をとる。レポートはインターネットシステム及び郵送による提出ができる。質問は Web サイトや郵送・電話等でできる。「面接授業」は入学直後全8科目（8単位）開講され、会場は神戸・岡山・京都で受講でき利便性に合わせて選択できる。「臨地実習」は全8科目（8単位）あり、1科目につき2日間の見学実習ならびに3日間の実習スクーリングで構成される。

III. 研究目的

効果的な教育支援を旨として、入学前授業終了時調査をもとに看護学科通信制課程（2年課程）の学生の入学前不安とその年代別特性を検討する。

IV. 研究方法

1. 調査対象

平成24年度入学前授業参加者124名。（調査実施日：2012年3月10日）

2. 調査方法

入学前授業終了後に無記名による自記式質問紙調査を実施した（所要時間20分程度）。質問紙は、調査対象者の背景についての8項目、入学前の不安についての9項目と自由記述で構成した。

対象者の背景についての質問は「年齢」「性別」「就労の有無」「勤務形態」「勤続年数」「就業施設の種類」「通信制教育の経験の有無」「入学のきっかけ」の8項目とした。

先行研究では学生が学習を継続する上での困難な点についての報告があり⁸⁾、それをもとに入学前の不安についての質問項目を作成した。質問は「レポートの作成」「学習時間の確保」「家庭との両立」「仕事との両立」「学習内容の理解」「自分の根気」「健康や体力」「経済的状況」「人間関係（教職員、学生等との）」の9項目とし、「不安がない」「あまり不安がない」「どちらともいえない」「やや不安」「不安」の5件法の選択式と自由記述式で回答を得た。

結果は単純集計を行ない、自由記述記載は単文を記録し文脈をコード化した。その後、文脈の類似性に沿って分類しネーミングした。分類とネーミングは筆者ら4名が協議し、妥当性について助言者が検討した³⁾。

なお入学前授業のタイトルは「学び直しの看護学」とし、Part1「レポート学習って何？」Part2「“トイレの神様”を題材にレポートを書いてみよう」Part3「CCNの使い方」で構成した。

Part2「“トイレの神様”を題材にレポートを書いてみよう」ではヒット曲“トイレの神様”⁹⁾をレポートの題材に選択し、エリクソンの発達段階¹⁰⁾をもとに学童期、思春期を論点にし、歌詞から理解できる作者の2つの発達段階についての解釈を示した。「設題と設問の解釈の仕方」「参考文献の検索方法とキーワードを調べる意味」「論述に必要な知識と活用したレポート作成方法」を中心に展開した。授業の所要時間は75分であった。

3. 倫理的配慮

入学前授業終了後、参加者に調査の目的、所要時

間（20分程度）、無記名で協力は自由意志であり参加者・不参加者に不利益は生じないこと、調査結果は、学会発表、論文投稿などで公表予定であることについて文書を用いて説明した。調査への参加協力の同意は、質問紙の提出をもって参加の意思を判断した。なお、本研究は筆者らの所属する大学の研究倫理審査委員会の承認を得た。

4. 結果

授業参加者は124名、入学予定者（175名）の70.9%で、質問紙の回答者は124名（回収率100%）であった。

1) 対象者の背景

年代は20歳代1名（0.8%）、30歳代47名（37.9%）、40歳代57名（46.0%）、50歳代17名（13.7%）、60歳代1名（0.8%）、無記述1名（0.8%）、性別は男性6名（4.8%）、女性118名（95.2%）であった（図1）。

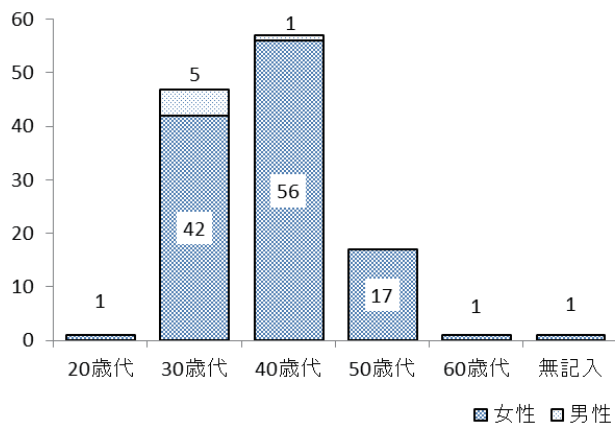


図1 対象者の年代と性別 (n = 124)

現在、就労しているものは122名、していないものは2名あり、通算勤務年数は、10年以上15年未満が最も多く75名（60.5%）、20年以上が24名（19.4%）、15年から20年未満が21名（16.9%）、無記述4名であった（表1）。

表1 対象者の勤務年数 (n=124)

勤務年数	人数	%
10年以上15年未満	75	60.5%
15年以上20年未満	21	16.9%
20年以上	24	19.4%
無記述	4	3.2%
計	124	100.0%

現在の勤務形態は、夜勤ありの2交替が最も多く48名（38.7%）、ついで日勤のみが43名（34.7%）、夜勤有の3交替は14名（11.3%）、その他11名（8.9%）、午前・午後の数時間は5名（4.0%）、午前のみ勤務が2名（1.6%）、無記述1名であった（表2）。

表2 勤務形態 (n=124)

勤務形態	人数	%
日勤	43	34.7%
2交替	48	38.7%
3交替	14	11.3%
午前	2	1.6%
午前・午後	5	4.0%
その他	11	8.9%
無記述	1	0.8%
計	124	100.0%

現在までに勤務した施設（場所）は表3のとおりであった。

表3 勤務した場所（複数回答）(n=321)

場 所	人数	%
診療所	55	17.1%
病院（外来）	178	55.5%
病院（病棟）	11	3.4%
病院（その他）	19	5.9%
老人保健施設	24	7.5%
特別養護老人ホーム	13	4.0%
訪問看護ステーション	17	5.3%
デイサービス	4	1.2%
その他	0	0.0%
計	321	100.0%

入学のきっかけについての質問（複数回答）では、自身の希望が最も多く107名（69.5%）、次いで勤務先の勧め17名（11.0%）、本学の卒業生の影響と在校生の影響が並び、どちらも14名で（9.1%）、その他2名（1.3%）であった（表4）。

表4 入学のきっかけ（複数回答）(n=154)

きっかけ	人数	%
自身の希望	107	69.5%
勤務先の勧め	17	11.0%
卒業生の影響	14	9.1%
在校生の影響	14	9.1%
その他	2	1.3%
計	154	100.0%

2) 入学前の不安について

入学前不安に関する9項目の質問で「やや不安」「不安」の合計が最も多かったのは『レポート作成』120名(96.8%)であり、2番目に多かったのは『学習時間の確保』103名(83.1%)、3番目は『学習内容の理解』99名(79.8%)、次に『仕事との両立』89名(71.8%)、『自分の根気』77名(62.1%)、『家庭との両立』69名(55.6%)、『健康や体力』51名(41.1%)、『経済的状況』50名(40.3%)と続き、最も少なかったのは『大学の人間関係』48名(38.7%)であった(図2)。

3) 年代別の「不安」「やや不安」の割合

質問項目ごとに年代別の「やや不安」「不安」の割合をみると、『レポートの作成』では最も高かったのは60歳と50歳代の学生であり、合わせて18名(100%)が「やや不安」「不安」と回答していた。次いで40歳代56名(98.2%)、続いて30歳代が44名(93.6%)、20歳代1名(100%)であった。『学習時間の確保』では30歳代が40名(85.1%)、2番目が40歳代で48名(84.2%)、続いて50歳代が13名(76.5%)、60歳代が1名(100%)で、20歳代は0名(0.0%)だった。『学習内容の理解』では、40歳代の割合が最も高く51名(89.5%)、次に50歳代が

14名(82.4%)、30歳代が31名(66.0%)、20歳代では1名(100%)、60歳代1名(100%)であった。『仕事との両立』では50歳代の割合が最も高く15名(88.2%)、次が40歳代で39名(68.4%)、続いて30歳代が32名(68.1%)で、20歳代1名(100%)、60歳代1名(100%)であった。『自分の根気』で「不安」「やや不安」の割合が最も高かったのは50歳代12名(70.6%)、続いて40歳代39名(68.4%)、30歳代24名(51.1%)、20歳代1名(100%)、60歳代は0名(0.0%)であった。『家庭との両立』では40歳代が最も高く39名(68.4%)、2番目は50歳代9名(52.9%)、30歳代20名(42.6.7%)で、20歳代と60歳代は0名(0.0%)であった。『健康や体力』では50歳代が最も高く10名(58.8%)、次が40歳代22名(38.6%)、30歳代18名(38.3%)、20歳代1名(100%)、60歳代は0名(0.0%)であった。『経済的状況』では40歳代が24名(42.1%)、50歳代7名(41.2%)、30歳代18名(38.3%)で、20歳代と60歳代は0名(0.0%)であった。『大学の人間関係』では、50歳代が8名(47.1%)で最も高く、40歳代21名(36.8%)、30歳代16名(34.0%)で、20歳代と60歳代はともに1名(100%)であった。年齢無記述は表5のとおりであった。

次に年代ごとに「不安」「やや不安」の割合を整

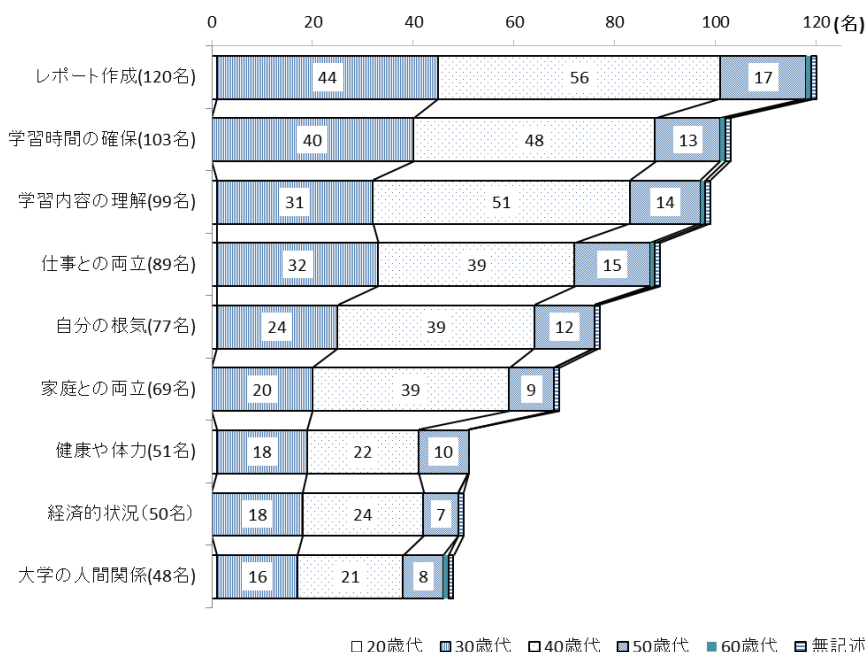


図2 年代別にみた「不安」「やや不安」の人数 (n = 124)

表5 年代別にみた「不安」「やや不安」

名 (%)

	20歳代 (n =1)	30歳代 (n =47)	40歳代 (n =57)	50歳代 (n =17)	60歳代 (n =1)	無記述 (n =1)	計
レポート作成	1 (100)	44 (93.6)	56 (98.2)	17 (100)	1 (100)	1 (100)	120 (96.8)
学習時間の確保	0	40 (85.1)	48 (84.2)	13 (76.5)	1 (100)	1 (100)	103 (83.1)
学習内容の理解	1 (100)	31 (66.0)	51 (89.5)	14 (82.4)	1 (100)	1 (100)	99 (79.8)
仕事との両立	1 (100)	32 (68.1)	39 (68.4)	15 (88.2)	1 (100)	1 (100)	89 (71.8)
自分の根気	1 (100)	24 (51.1)	39 (68.4)	12 (70.6)	0	1 (100)	77 (62.1)
家庭との両立	0	20 (42.6)	39 (68.4)	9 (52.9)	0	1 (100)	69 (55.6)
健康や体力	1 (100)	18 (38.3)	22 (38.6)	10 (58.8)	0	0	51 (41.1)
経済的状況	0	18 (38.3)	24 (42.1)	7 (41.2)	0	1 (100)	50 (40.3)
大学の人間関係	1 (100)	16 (34.0)	21 (36.8)	8 (47.1)	1 (100)	1 (100)	48 (38.7)

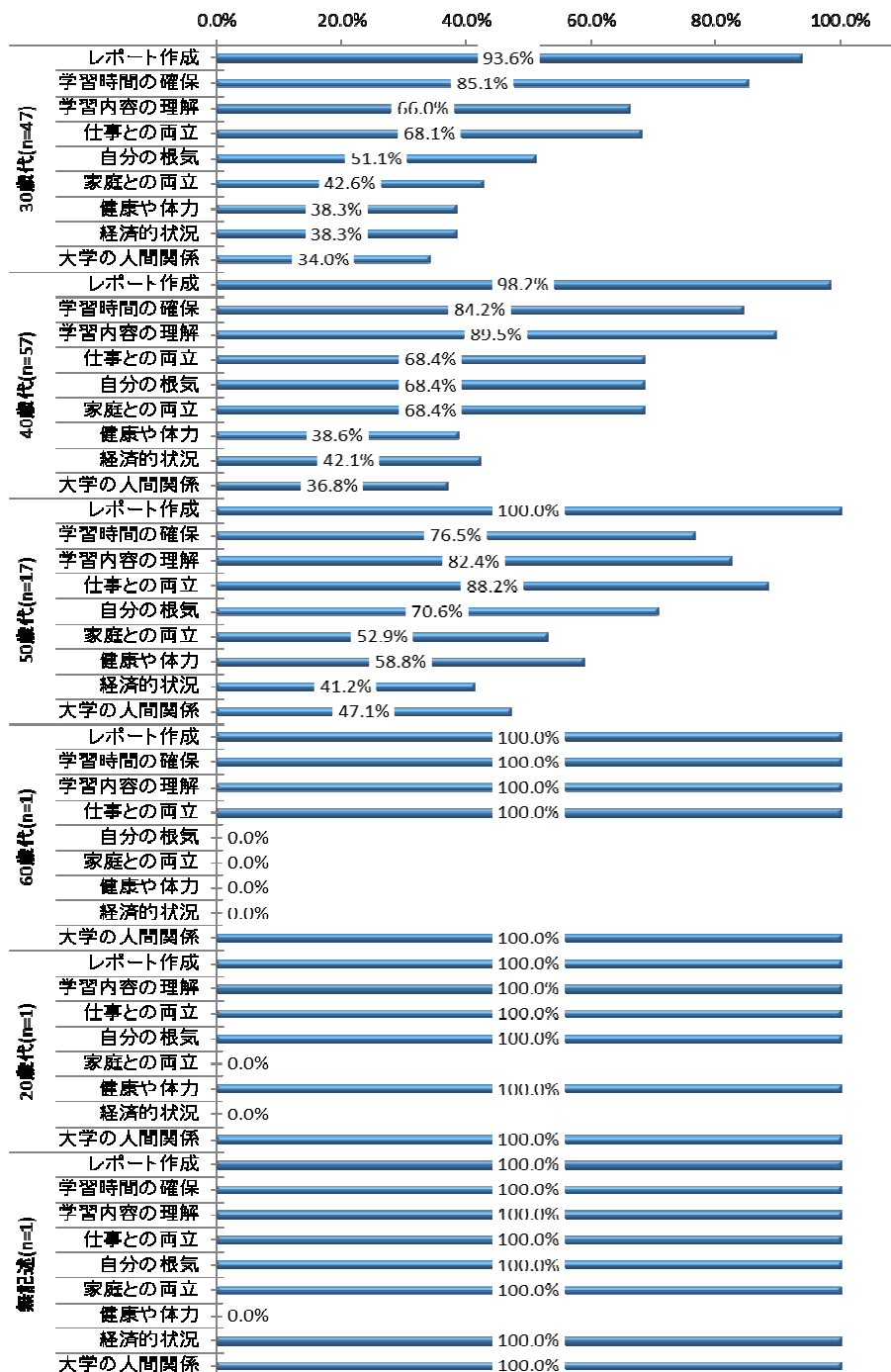


図3 年代別にみた「やや不安」「不安」の割合

理すると、30歳代では『レポート作成』(93.6%)が最も高く、『学習時間の確保』(85.1%)、次が『仕事との両立』(68.1%)『学習内容の理解』(66.0%)、『自分の根気』(51.1%)、『家庭との両立』(42.6%)、『健康や体力』(38.3%)、『経済状況』(38.3%)、『大学の人間関係』(34.0%)の順であった。40歳代では『レポート作成』(98.2%)、2番目が『学習内容の理解』(89.5%)、次が『学習時間の確保』(84.2%)、続いて『仕事との両立』『自分の根気』『家庭との両立』がそれぞれ(68.4%)、『経済状況』(42.1%)、『健康や体力』(38.6%)、『大学の人間関係』(36.8%)との順になった。50歳代では『レポートの作成』(100.0%)が最も高く、2番目が『仕事との両立』(88.2%)、その次が『学習内容の理解』(82.4%)、続いて『学習時間の確保』(76.5%)、『自分の根気』(70.6%)、『健康や体力』(58.8%)、『家庭との両立』

(52.9%)、『大学の人間関係』(47.1%)、『経済状況』(41.2%)の順であった。20歳代、60歳代、年齢無記述の結果は図3のとおりであった。

4) 年齢別にみた入学前不安に関する自由記述

2012年度の報告³⁾で確認した不安に関する【学習課題に関する不安と懸念】【レポート課題に対する苦手、不安】【成人期にある学生の役割に関わる不安と懸念】の3つのカテゴリに分類された文脈数を年代別に集計した。各カテゴリとも年代別の記述文脈の割合に差は見られなかった(表6、表7)。

V. 考察

1. 質問項目別にみた不安の特性

「やや不安」「不安」の人数の最も多かったのが『レポートの作成』であった。主な要因として通信制課

表6 不安に関わる自由記述の内容分類

【カテゴリ】	<サブカテゴリ>
学習課題に関する不安と懸念 (86)	学習の継続が不安 (6)
	通信制の学習形態に関する不安 (8)
	パソコンの使用に関する不安 (12)
	入学後のサポートに関する情報不足 (22)
	卒業や国家試験合格の精神的圧迫 (11)
	文献資料が活用できるか不安 (4)
	スクーリング、実習についての不安 (11)
	学習課題に関する漠然とした不安 (12)
レポート課題に対する苦手、不安 (57)	レポート課題に関するシンプルな不安 (23)
	文章書くことに関する気掛りと不安 (15)
	書くことの経験不足による不安 (5)
	提出期限とレポート量に関する不安 (9)
	レポートの精度についての気掛り (6)
成人期にある学生の役割に関わる不安と懸念 (53)	家庭との両立が不安 (15)
	仕事との両立が不安 (20)
	経済的な負担 (5)
	年齢による体力、学力の低下の懸念と不安 (5)
	通学に時間がかかる懸念 (8)

表7 年代別にみた不安に関わる自由記述の文脈数 (n=年代別の記述文脈合計)

	【学習課題に関する不安と懸念】	【レポート課題に対する苦手、不安】	【成人期にある学生の役割に関わる不安と懸念】	計
30歳代 (n=141)	29 (20.6%)	22 (15.6%)	21 (14.9%)	72
40歳代 (n=180)	42 (23.3%)	27 (15.0%)	21 (11.7%)	90
50歳代 (n=60)	14 (23.3%)	6 (10.0%)	10 (16.7%)	30
20歳代 (n=2)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0
60歳代 (n=3)	1 (33.3%)	1 (33.3%)	0 (0.0%)	2
無記述 (n=3)	0 (0.0%)	1 (33.3%)	1 (33.3%)	2
計	86	57	53	196

程の履修科目の76%がテキスト学習であり、学習手段が自学自習とレポート作成によるからではないかと考えられる。自由記述欄には「文章能力がない」「レポートを書いたことがない」「病棟経験がなくレポートが書けるのか」等の文脈があり、入学生は学業から離れて10年以上経ており、日常レポート等を作成する機会が少ないからとも考えられる。また、テキスト（教科書）を用い自学自習をもとにレポートを作成することへの不安の現れとも捉えられる。

2番目に『学習時間の確保』で「やや不安」「不安」の数が多かったのは、対象者の122名（98.4%）が就業しており、その内の62名（50.0%）が2交替、3交替の夜勤に就いていることが大きな要因であると理解できる。また、入学生の多くは家庭や地域で重要な役割を担う世代でもある。自由記述欄には「一人で学習を続けられるのか」「スクーリング時期や実習場所」「入学後の行事予定等の告知時期に関する不安」「大学と家の距離に関する不安」「2年で卒業できるのか」などの文脈があり、仕事や家庭、遠距離通学など成人期の役割を担っていて学習時間に制約があることが具体的によくわかるものであった。

3番目に「不安」「やや不安」が多かった『学習内容の理解』の年代別の内訳をみると、30歳代が31名（66.0%）と最も低く、50歳代以上よりも40歳代に占める不安の割合が約7.0%程度高いことが解った。また自由記述欄には「ついていけないのか」「何から学習を始めると良いのか」「入学後の学習のサポート体制」「引用文献の活用に関する不安」など、通信制課程独自の学習サポートに関わる文脈があった。現在インターネットシステムQ&A及び質問票の郵送により学生の質問に迅速に対応しているが、さらに十分に活用するための工夫が必要と考えられる。

4番目に多かった『仕事との両立』の自由記述には「日勤定時に終われない、夜勤月6回、人手不足」「仕事忙しく時間つくれるか不安」などの記載があることから厳しい労働環境にある学生がいることがうかがえる。

5番目に多かった『自分の根気』では各年齢とも50～70%前後と他の質問項目に比べて不安の程度は

低くなっている。このことは、入学のきっかけとして自身の希望がほとんどを占め、通信制学習を始めることに対する決意も反映していると考えられる。また、全員が10年以上の就業経験を持っており「根気強さ」が育まれた集団であることがわかる。自由記述では「頑張ってみようと再度思えた」「入学しようと思った以上頑張ります」「今しかないと思えば頑張る」等、どの年代層でも【学習への前向きな心境・決意】³⁾を表す内容があることからよくわかる。

続く『家庭との両立』は30歳代が20名（42.6%）と最も低く、40歳代が39名（68.4%）、50歳代9名（52.9%）と、40歳代の不安の高いことがわかる。自由記述欄では40歳代の「家事や子どもとのバランスがうまくとれないのではないかな」「家庭との両立で時間がとれるか不安」、30歳代の「子ども小さい」「家庭との両立が不安」「家事子育てこなせるのか自信ない」「2歳、4歳の子どもがいて時間の確保が不安」「育児や仕事との時間配分と気力や体力が不安」等の文脈があり家庭と学業の両立が難しいこと、なかでも育児に関しては入学後個別の対応が必要なことなどが解った。

次の『健康や体力』では30歳代18名（38.3%）、40歳代22名（38.6%）と不安は比較的lowく大きな差はなかったが、50歳代が10名（58.8%）と半数以上で不安が高い特性があった。50歳代の自由記述に「年齢、体力気にかかる」「年齢的な記憶力の低下や体力の低下」「体力的、精神的に不安だらけ」等があることから50歳代はそれ以下の年代に比べて健康、体力に関わる不安を持っていることがわかる。

『経済的状況』では各年代層とも38～42%程度であった。入学後の休学や退学の理由を経済的なものが多いと理解していたが、相反した結果であった。40歳代が24名（42.1%）と他年代層よりやや高くなっている。自由記述欄では、30歳代で「お金を借りて入学した」、40歳代で「娘の大学進学と重なる」「仕事をしながらのため、学費などが気になる」等の記述があった。「娘の大学進学と重なる」との記述にみられるように、子どもの教育費のかかる時期と重なることもある年代層であることが理解できる。

最も「やや不安」「不安」の少なかった『大学の人間関係』では、30歳代が16名(34.0%)、40歳代が21名(36.8%)であるのにたいして、50歳代は8名(47.1%)と10%以上高かったのは、他の若い世代とうまくやっていけるか等のジェネレーションギャップによるものではないかと思われた。

2. 入学前の不安からみた年代別特性

30歳代の「やや不安」「不安」の割合は『レポート作成』が最も高く、次が『学習時間の確保』、その次が『仕事との両立』、『学習内容の理解』、『自分の根気』と続いている。このことから30歳代の特性として『学習時間の確保』に関する不安が他の項目よりも高いことが解った。

40歳代では『レポートの作成』の次に『学習内容の理解』に関する不安の割合が高く、次に『学習時間の確保』、続いて『自分の根気』『仕事との両立』『家庭との両立』が並んでいる。このことから『学習内容の理解』についての不安が高い特性が窺えた。

50歳代では、『レポート作成』が最も高く、その次が『仕事との両立』『学習内容の理解』『学習時間の確保』『自分の根気』『健康や体力』『家庭との両立』『大学での人間関係』『経済的状況』と近差で続いている。中でも『仕事との両立』に関する不安が他の年代より高いことが解った。

VI. 結語

日々の通信制課程での教育活動ではとすれば「学生」をひとくくりで捉えがちになるが、本調査から入学前の不安からその年代別の特性を知ることが出来た。

成人学習理論の提唱者である Knowles, M は¹¹⁾「成人の過去の経験は、学習のための資源である」「成人は自立した学習者である」「成人の学習の準備性は、人生における発達段階に応じて生じてくる」「成人の学びは、課題や問題に基づいて導かれる」と記している。成人期にある学生の持つ入学前の不安の特性を踏まえ、学生の過去の経験を活かし、自立性を尊重した適切な学習課題を提供することが重要と認

識した。

本調査では入学前不安と年代別特性の把握にとどまっているが、入学後、学習に関する不安や教育課題が変化していくと予測されることから継続的に調査し、効果的な教育支援につなげていくことが求められる。

VII. 引用文献

- 1) 西出順子, 武ユカリ, 安齋三枝子: 初めてのプレカレッジ(入学前教育)報告, 神戸常盤大学緑葉, 第7号, p.5-16, 2011.
- 2) 金川治美, 西出順子, 武ユカリ, 安齋三枝子: 2年課程(通信制)看護学科における入学前教育の実施と検討(1) - 授業終了時の質問紙調査から -, 第42回日本看護学会抄録集看護総合, p.142, 2011.
- 3) 金川治美, 西出順子, 武ユカリ, 小坂素子: 2年生課程(通信制)看護学科における入学前教育の実施と検討(2) - 授業終了時調査の自由記述からみた特性 -, 第43回日本看護学会抄録集看護教育, p.24, 2012.
- 4) 横山京子, 亀岡智美, 定廣和香子, 舟島なおみ: 短期大学卒業直後に看護学士課程へ編入した学生の学習経験 - 短期大学を卒業した編入学生理解のための指標の探求 -, 看護教育学研究, 11巻(1号), p.26-39, 2002.
- 5) 江頭典江: 多様化する入学生に対する看護学教育のあり方, 大阪教育大学大学院健康科学専攻生涯教育組織論研究修士論文集, 2007.
- 6) 小濱優子: 社会人学生の学習支援に関する研究, 文教大学附属教育研究所紀要第11号, p.83-89, 2002.
- 7) Malcolm S. Knowles: The Modern Practice of Adult Education: From Pedagogy to Andragogy, Cambridge, USA, 1980.
堀薫夫, 三輪建二: 成人教育の現代的実践 - ベダゴジーからアンドラゴジーへ, p.50, 鳳書房, Japan, 2002.
- 8) 長尾厚子, 河野益美, 金川治美, 島内敦子: 短

期大学における2年課程（通信制）教育の意義と課題, 神戸常盤短期大学紀要, 第29号, p.13-23, 2007.

- 9) 植村花菜・山田ひろし作詞, 植村花菜作曲: トイレの神様, キングレコード, 2010.
- 10) 大西和子, 岡部聡子: 成人看護学概論 第2版, p.36-37, ヌーベルヒロカワ, 2011.
- 11) 前掲書7), p.40.

Ⅶ. 参考文献

- 1) 岡本祐子: アイデンティティ生涯発達論の射程, ミネルバ書房, 2002.
- 2) 河合隼雄: 中年クライシス, 朝日新聞社, 1996.
- 3) 本江朝美, 高橋ゆかり, 桑田恵子, 杉山洋介, 谷山牧, 益子直紀, 吉岡一美: 看護学生の不安に対する認知的評価と Sense of Coherence との関連, 上武大学看護学部紀要 第5巻第1号, 2~10, 2009.
- 4) Patricia.Cranton: Professional Development as Transformative Learning: New Perspectives for Teachers of Adults, Jossey-Bass. USA.1996.
入江直子, 三輪健二: おとなの学びを創るー専門職の省察的実践をめざして, 鳳書房, 2004.